

特定非営利活動法人 太平洋戦史館

# 戦史館だより

2024年1月31日発行  
 戦史館事務局〒029-4427  
 岩手県奥州市衣川陣場下  
 41番地盤オフィス花岡  
 編集発行人 花岡千賀子

会長理事 岩淵 宣輝 事務局長 花岡千賀子 ☎0197-52-3000 FAX 0197-52-4575

今年は大震災と航空機事故で始まりましたが、気候変動も一層激化しそうです。前号の会報に「世界各地で戦争なんかしてる場合じゃない!」と書いたところ、多くの会員から賛同いただきました。ウクライナ戦争、イスラエルによるガザ攻撃に続き、次はどこだ?と東アジア危機を煽りたて、防衛費という名の軍事費を伸ばそうとする人達さえいます。戦争は“殺しと壊し”以外の何ものでもなく“平和のための戦争”なんてありえない。

毎号戦史館だより3ページ目に「平和を願うなら避戦の行動を…プラスの国際交流を」と掲げていても、いったん始まった戦争は止まらない。日本はもはや武器を輸出できる国になったことで、知らないうちに戦争に加担しているかもしれない。新たな戦争に加担せず回避するためには、決して目をそらさずにいたい。戦史館は資料展示を通じて、海外の戦場に取り残された戦没者の遺骸捜索を通じて、避戦活動を続けます。

## 遺骨帰還へ 派遣は再開したけれど…

昨年10月、厚労省からビアク島方面の『現地調査・遺骨収集派遣』が急遽再開されるという連絡が入り、11月25日からの派遣に、戦史館には3名の参加要請が来ました。続いて2024年1月25日から第2次派遣、次年度以降も継続して派遣を計画しているようです。

遺骨帰還の派遣は8年ぶり。2015年10月に無念のゼロ柱帰還となって取り残された遺骨が漸く帰国できると期待して、1ヵ月後の出発に向けてドタバタと準備が始まりました。8年前のあの時のメンバーの有馬咲子理事、岩淵信子会員、新たに監事の小澤秀樹さん。ビアク島戦没者遺族の3名が戦史館の代表としてビアク派遣が決まりました。岩淵会長は昨年3月、インドネシア教育文化省から「イワブチを除く他の団員だけで」と渡航が制限され未解決のままです。(詳細は戦史館だより128号)

厚労省は、2015年にゼロ柱帰還となった理由を「インドネシア政府の都合によりご遺骨の収容ができない」と発表しましたが、本当はジャカルタの日本大使館が公文書の送り先を間違えたことが原因であることは度々お伝えしてきたとおりです。8年間のブランクは大きくこの間に遺骨帰還の活動の主体は、厚労省から日本戦没者遺骨収集推進協会に代わり、手続きは複雑に、事務処理はお役所以上に紋切り型。戦史館は戸惑うばかりです。

届いた日程表を見ると、現地での活動は、仮安置された遺骸を専門家が鑑定する作業が中心のようで、戦史館派遣の3名は、その補助作業をするのでしょうか?

以前は未送還事業で収容し仮安置された遺骸は、インドネシア大学の法医学者チームが鑑定し、日本兵であると判定されると茶毘にふされ、死者儀礼を経て団員と共に帰還していました。今回の日程表は全く違います。日本から同行した専門家が判定した後、検体をジャカルタに移してDNA鑑定が行われるところまでです。さらに次の段階で教育文化省は考古学的調査が必要と言うのでしょから、遺骨収集派遣という名称になっていますが、遺骨が団員と共に帰還できるわけではないということが日程表から読み取れました。

## ビアクの仮安置遺骸 衝撃！紛失？盗難？

ビアク島の様子は2022年の会報 126号で遺骸仮安置所が鍵のかかる頑丈な建物に作り替えられたとお伝えしたのが最後ですが、ビアクに到着した咲子さん信子さんは「私達が知っている西洞窟とはまるで違う…」と、この8年間の変化に仰天。その様子が小澤さんの報告メールに添付された写真からありありと伝わってきました。更にリアルタイムで衝撃のメールが続きます。仮安置室…目の前にあるのはプラスチックのカラーボックス26箱。頭蓋骨だけが入った箱、大腿骨だけ20本が入った箱、小さな骨のかけらが入った箱…。

鑑定が始まり、日本兵の遺骸ではないという事実が浮かび上がってきました。2015年の現場を知る咲子さん信子さんは「15年10月に残してきた袋の中のご遺骨はどこへ行ったんだろう？百体位あったはずだし遺留品もたくさん」と。



鑑定現場写真を添付してきた小澤さんのメールを受信した戦史館でも仰天。大急ぎで仮安置されているはずの記録の情報をメールしました。添付したのは未送還情報収集事業のビアクに限定した現地調査報告書。写真や図のデータ量が大きいので4回に分けて送信。2014年9月6日に梅澤慶子さん真野康弘さんが作成した記録を一部抜粋して紹介します。

発見場所はビアク島西洞窟から北へ35km、車の走行メーターで測定して1時間の場所。第三者でもその場所を検証できるよう、地図には目印のマークや写真も貼りつけて加筆。地名、発見者と報告者の氏名、電話番号、発見状況…遺骸は個体別に専用収容袋に入れて

日付と場所をマジックで記入。推定柱数この場所では12柱。遺留品も撮影。この場所では鉄カブト2、ナイフの鞘、ガスマスク部品…と記入が続き遺留品は遺骸と一緒に西洞窟の仮安置所まで運び



危険物の手榴弾も2個見つかっているので、それは別にして警察に連絡するというのが基本です。遺骨収容では白骨化した遺骸の傍らで見つかる遺留品はとても重要な状況証拠。遺留品が日本軍の官給品であれば日本兵である可能性が高いし、水筒や飯ごう万年筆などに氏名が刻まれていて個人を特定できた例もあります。

会議で小澤さんが、仮安置所の管理人ユスフ・ルマロペン氏に「遺骸と一緒にだった遺留品は？」と尋ねると「わからない」。彼の妻が野ざらしで置かれた袋を持ってきました。中身は遺留品の一部、何と手榴弾も一緒です。日本兵の遺骸は、証拠の鉄カブト、ガスマスク部品、水筒、飯ごう等とともに、持ち去られてしまったのでしょうか？

## 鑑定の結果 そして今後の方向は？

専門の鑑定人の最終結論は、26箱のうちの2箱の頭蓋骨は、ほぼ現地人の女性や子供で日本人ではない。箱によっては24箱の一部に日本人のご遺骨が含まれる可能性はあるが、子供や女性の遺骸と一緒に収納されており、証明できない。したがってDNA鑑定のためのサンプル採取はゼロ…という結論でした。

ビアク・ヌンフォル市当局と日本側の会議の概要は次のようです。インドネシア側が遺骸盗難事件について仮安置所の管理がずさんだったことを謝罪し、事件の捜査も開始すること。今後の遺骸の収容場所と方法については仕切り直しが必要。日本側からビアク市役所にその管理をお願いする方向で進めているが具体的には未定。西洞窟の遺骸仮安置所については、ユスフ氏への支払いは今後一切打ち切ることです承されました。

そのユスフ氏、何と「新たに遺骸を見つけた。全部で40体くらい。現地でそのままにしている」と一体分と思われる遺骸と鉄カブトが整然と並べられた写真を持参。撮影日はどれも2022年11月頃。長年、ユスフを見てきた人は彼らしい…とあきれるでしょうね。

第1次派遣の結果を受けて1月の第2次派遣計画は次年度に延期になりました。戦史館からは戦跡カメラマンの安島さん、ビアク遺族の村山さん小野寺さん（3名とも60代なかば）が派遣の準備に入っていましたが…。インドネシア側は1月は予算がない、2月は大統領選でダメ、3月はラマダン、4月も…と半年前に合意していても相変わらずです。

## 岩渕会長のパプア入域制限に 新たな“デマ”

会報 128号でこの事件をお伝えしたところ、多くの会員から心配されました。イワブチがコミュニティの不特定多数とトラブルになっているからと教育文化省が主張するのですが、真相の確認に動いてくれた外務省の課長から、具体的なトラブルの事実も個人も特定できなかったと連絡をいただいたところまでです。今回の派遣で団長が現地ヒアリングすると、パプア州文化財保護局のデシー女史がジャヤプラ・プアイ方面ハリー・ストロ氏との電話で「イワブチが住民に教会を建ててやると約束したのに実現されなかった」というハナシが飛び出したようです。ハリーさんという人と岩渕は面識ないのですが…

さっそく未送還事業プアイ方面の記録を検証しました。教会という単語に関連して、かつて牧師の宿舎に使われていた小屋を遺骸安置所として使わせてもらえないかと牧師の代行の人に相談したメモが残っていました。

それとは別に当時、未送還事業を受注した戦史館を誹謗中傷するブログが存在していてそこには『プアイ村で遺骸仮安置所兼鑑定所として新たな構築物を作ろうとする動きが日本側から提案されている。設計図通り建ててくれればお金の心配はするなと言った』と書かれています。このデマの根拠となった出来事はジャヤプラ在住のインドネシア人建築家が、広く立派な事務所か？膨大な費用の設計図を持ち込んできたアレでしょう。しかし、未送還事業では建築物は建ちません。可能な支出は、借料・損料、消耗品費、雑役務費、修繕費程度。お断りしましたが、日本の事業に便乗したい金儲けをしたいと勘違いする人もいるでしょう。そして、話は人から人へ伝わるうちに、全く違う話になってしまう…まるで「伝言ゲーム」。次はどんな新手のデマが来るか？ちょっとだけ楽しむゆとりも。